



感染症とたたかう

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学感染症共同研究拠点 〒852-8521 長崎市文教町1-14 TEL:0120-095-819 FAX:095-819-2960

可愛い名前だけど油断しないで！ 「リンゴ病」が例年を上回る流行に

佐賀県や福岡県でも「注意報」 長崎県にも拡がるかも

2018年11月から19年1月にかけて、「リンゴ病」と呼ばれる病気が例年を上回る勢いで拡がり、話題になっています。厚生労働省国立感染症研究所による集計では、関東エリアでの流行は2月に入って収束に向かっているものの、東北・北陸の一部では依然として流行が続いています。長崎県内では今のところ、目立った数の感染報告は出ていませんが、お隣の佐賀県や福岡県などでは今年の内から現在も流行が続いていますので、気をつけたいところです。

リンゴ病は、「ヒトパルボウイルスB19」というウイルスによる感染症です。感染してから10～20日の潜伏期間の後、頬をはじめ、からだのいろいろな場所に赤い発疹が広がります。発疹が出る7～10日前に、微熱や風邪のような症状が現れることもあります。

生後半年くらいから小学校低学年あたりまでの子どもがかかると多く、頬がリンゴのように赤くなることから「リンゴ病」と呼ばれていますが、正式な名前は「伝染性紅斑(こうはん)」と言います。



合併症を起こすことも 妊婦さんは特に注意が必要！

健康な子どもがリンゴ病にかかっても、多くの場合はそれほど強い症状は出ません。赤い発疹も1週間ほどで治まります。ただ、発疹が長引いたり、発疹が治まった個所を掻きむしったりすると再発することがあります。

また、リンゴ病の原因となるウイルスは、赤血球の素になる細胞に悪影響を及ぼし、1週間～10日間ほど赤血球が正常に作られない状態になります。そのため、年齢に関わらず元々溶血性貧血などの病気で貧血傾向が強い人は、医師とよく相談してください。麻疹や風疹と同様、リンゴ病も1度かかれば2度とわからない病気とされていますが、かかったことがない大人もかなりの数に上ると見られています。予防のためのワクチンも開発されていません。

大人がリンゴ病のウイルスに感染しても、多くの場合は何の症状も出ませんが、手や腕、膝の関節痛を伴うことがあるほか、疾患や免疫抑制剤などの影響で抵抗力が低下している場合、重い合併症を起こす恐れもあります。特に妊婦さんの場合、赤ちゃんが流産や死産となる可能性もあり、注意が必要です(3ページに関連記事)。